

聖霊降臨の主日

ヨハネ 20・19-23

2017.6.4 高円寺教会 9:30 ミサ

イエズス会 平林 冬樹神父

聖霊降臨の主日に当たる今日のミサで読まれるヨハネ福音書 20 章 19-23 節は、ヨハネ福音書に記された聖霊降臨の出来事と言われます。ヨハネは、その出来事をきわめて簡潔に伝えています。週の初めの日、イエスが復活した日の夕方、ユダヤ人を恐れ、自分たちの家の戸に鍵をかけて集まっていた弟子たちの真ん中に復活のイエスがお立ちになって平和を告げました。イエスは、ここで弟子たちに派遣の使命を与えます。こうして、派遣、聖霊の授与と罪の赦しが、復活のイエスによって一つに統合されたのです。

復活のイエスによる罪からの解放

罪を赦す権能を授けられた弟子たちは、「わたしは、罪とは無縁の人間です」と言って周りを見渡し、「ああ、あなたは罪人だ。でも赦してあげよう」とか、「あなたの罪は、赦してあげない」などと言う立場に立ったというのでしょうか。

そもそも「罪」とは何でしょうか。一般に罪とは、法律違反や掟破りと理解されます。法律に違反していなければ罪を問われません。規則に違反していなければ、咎められることはありません。しかしイエスは、「罪」を法令や規則、道徳をも超えた、神と人との関わりとしてとらえています。聖書で言う「罪」は、神と関係を切っていく生き方です。いくら法令を守り、道徳的に正しくても、神を離れ、神との交流を絶つ。これが罪です。だから神のみ心を行わないばかりか、神に希望をおかない。これが罪です。

じつは、弟子たちこそ罪人。パウロの言葉を借りるなら、「その罪人の中で最たる者」(一テモテ 1・15)とパウロが自から告白しているように、弟子たちこそ、罪の中にいたのです。イエスがとらえられ、十字架につけられたとき、ペトロ始め弟子たちは、イエスを捨てました。神との関係を立ち切り、自分は神などに関係ないとまで宣言したのです。そもそも、この弟子たちはイエスと行動を共にしていたときも、イエスをよく理解していなかったようです。「こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか」(ヨハネ 14・9)とイエスに言われます。最後の晩餐の後、弟子たちは、「あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます」(ヨハネ 16・30) と言いました。イエスはそれに答えます。「今ようやく信じるようになったのか。だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや既に来ている」(ヨハネ 16・31-32)。そのことばどおり、ペトロは、イエスがとらえられた後、大祭司の屋敷で、「呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始め」るのです(マルコ 14・71)。神から離れ、神を否定しました。「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げて」(マルコ 14・50)しまいました。

イエスの死後、ペトロたちは、イエスを葬った墓が空だと気付いても、「ああ、墓が空っぽだ」と思い、「家に帰って行った」(ヨハネ 20・10)のです。「イエスはどこへ行ったのだろう」と必死に探し回ったわけでもない。復活のイエスと出会ったとの報告を聞いても、弟子たちは恐れに取り付かれ、戸に鍵をかけて集まるだけ。それどころではありません。ヨハネ福音書によれば、ペトロたちは、故郷のガリラヤに帰ってしまいました。こうして、イエスのことばどおりになったのです。自分の心に閉じこもり、恐れて、神が見えない弟子たちです。

このように神を捨て、罪の中にいた弟子たちの真ん中に、今、イエスが立ち、「あなたがたに平安があるように」(ヨハネ 20・19)と言って、聖霊をくださいました。しょげてうずくまっている弟子たちを追いかけ、探し出し励ましてくださったのは、イエスです。イエスのほうから先に手を差し伸べ、「平安」をくださる。これは、祝福の言葉です。イエスは、弟子たちを恨むことも、なじることもなさらない。恐れて戸に鍵をかけ、立てない弟子たちに「平安があるように」と言ってくださる。そして聖霊を送り、罪を赦す権能までお与えになる。イエスが、圧倒的な愛の息吹で、弟子たちに向かいあってくくださったのです。

このように、復活のイエスによる弟子たちへの平和と聖霊の授与と、罪の赦しは、一つにまとまってきます。

イエスの平和

平和とはなんでしょうか。ただ、いさかいが起きないこと、戦争が起こらないことではありません。虐げられている者が黙って耐えて、何も争いがない。これは平和ではありません。人が互いの尊厳と価値を認め合い、こころ通い合わせ触れ合うこと。互いに生かし合う関係に生きること。これが平和ではないでしょうか。いっぽう赦しとは、自分のこころに相手を入れることといわれます。イエスは弟子たちをご自分のこころから追い出したことはありません。その意味で、神にとって、平和と赦しとは表裏一体です。だから、この弟子たちは、神の一方的な愛の力で神との関係を取り戻させていただき、神との平和を得ました。これが罪の赦しの体験です。こうして弟子たちは、復活のイエスによって取り戻したその平和を人びとにも及ぼす。これが弟子たちに託された罪の赦しの権能です。

マルコ福音書の8章に、イエスが、ご自分の運命を予告なさった出来事が記されています。人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっていると弟子たちに教え始められました(マルコ 8・31 参照)。弟子たちは、「みんなから排斥されて殺され」というイエスのことばにつまずいてしまいました。そこだけが印象に残ってしまう。だからペトロは、イエスをわきへお連れしていさめました(マルコ 8・32 参照)。本当にイエスのことが分からない。繰り返しご受難の予告を聞いても、その意味が分からない。そして復活のイエスに出会っても、まだ意味が分からない。

いつ分かったのでしょうか。聖霊降臨のときです。あんなに恐れて、戸に鍵をかけて閉じこもっていたペトロたちが、今日読まれた使徒言行録の続きのように(使徒 2・14 以下参照)堂々とイエスについてあかしています。聖霊降臨でやっ

と、イエスが分かる。イエスから聞いたことばの意味がわかる。復活のイエスとじかに会っても、まだ理解できなかつた弟子たちが、分かるようになったのは、聖霊をいただいてからです。そして、教会が誕生しました。

こんな弱々しい男、自分の愛する弟子たちからも捨てられてしまって、奴隷のように十字架に付けられ、ぼろくずのように死んでいった男が、自分の救い主だ、世界の救いだ、希望だ、などということが信じられるでしょうか。こんな理屈に合わないことが信じられるのは、聖霊の働き以外の何物でもない。聖霊を受け、見違えるように生まれ変わったこの弟子たちが、いのちをかけてあかししてくださったからこそ、二千年の間教会が続いている。この聖霊に生かされている教会がここにあります。みなさんもそうです。わたしたちもそうです。自分の力で信じていくのではない。自分の力で愛を実現していくのでもない。聖霊のめぐみによって、わたしたちは、どんな苦しいことがあつたとしても、復活のイエスが支えていてくださることを励みにしながら、そしてわたしたちには心臓で動いていない永遠のいのちが、もう与えられていることを心に刻みながら、希望をもって、今日からまた新しい信仰の一步を踏み出していきたいと思ひます。